レポート

子どもの居場所づくりシンポジウム「ウィズコロナ社会における今を考える」

１１月１５日（日）ひと・まち交流館 京都において、『子どもの居場所づくり「支援の輪」サポート事業』のキックオフイベントを兼ねたシンポジウムを開催しました。本事業のアドバイザーである山科醍醐こどものひろば理事長の村井琢哉さんのコーディネートにより、子ども食堂や学習支援の新型コロナウイルスの影響や子どもの支援のあり方について議論を交わしました。今回、登壇者の発言要旨をダイジェスト版でお届けします。

ハピネス子ども食堂　代表　宇野明香さん

南区で子ども食堂を立ち上げて５年目になります。子ども食堂と学習会を交互に実施しており、約３０人の子どもたちが参加し、約１０名のボランティアとともに運営しています。子ども食堂が開催できない間は、食材を届ける活動やお弁当の配布を行っています。

ハイ・どうぞ子ども食堂　代表　小林敬子さん

中京区で子ども食堂を立ち上げて４年目になります。子ども食堂の他、絵本ひろばや高齢者のふれあいサロンを開催するなど幅広く活動しています。近くにある大学をはじめ、様々な地域の団体・機関と一緒に活動しています。

公益財団法人 京都市ユースサービス協会　竹田明子さん

市内の１８か所拠点で学習支援事業に取り組んでいます。経済的な面などで家庭での学習環境が整いにくい世帯の中高生に対し、大学生などのボランティアが学習をサポートしています。

コーディネーター（聞き手）特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば理事長　村井琢哉さん

地域を基盤とした子どもの支援を展開しており、本事業のアドバイザーを務めています。

〈コロナ禍で工夫したことや新しく始めた取り組み〉

宇野さん）緊急事態宣言下では子ども食堂も休まざるを得ませんでした。その間も助けを求める声があって、どのような形であれば支援が出来るのかを考えていました。いつも配達してもらっている野菜を、私自身が困っているご家庭へ届けに行き、

顔が見られるときは様子を聞いたりしていました。近隣地域を対象にテイクアウト方式の弁当配布も行いました。

小林さん）大学など関係機関・団体が自粛を求められ、私たちも自分たちで出来ることを考えた時、弁当配布を玄関先で受け渡しを行う形で実施することに決めました。こんな時だからこそ「何もしないのではなく、やれることをやろう」という心構えを持ち、必要な感染対策を行ったうえで、たくさんの人と相談しながら活動を再開しています。子どもたちから「久しぶり」という声をもらい、そのような声をもらえることに救いを感じています。スタッフ同士でもお互いが再会できた喜びが力になりました。

竹田さん）感染が拡大する中、子ども自身や保護者の方々に感染対策の説明を行いました。また、話し合いを重ね、参加に不安を覚えたら参加しなくても大丈夫、という結論に至りました。緊急事態宣言下で、「ステイホーム」がしんどいという子どもたちのため緊急個別的に対応を行ったケースもありました。電話や手紙を通じて子どもや保護者の声を聞き、居場所を求めていると感じました。相談に来られるケースもあり、つながりを必要としている人がいるのだから出来ることはやろうと思っています。

〈子どもたちの「声」を受けとめる〉

宇野さん）休校中に親とギスギスした感じになっており、これ以上自分のことで親にまた何か言われたくないという思いを持った子がいました。家では言えないようなことも、子ども食堂で出会う大人とは話すことが出来る、その関係づくりの大事さを実感できました。また、地域の民生委員さんにも情報共有するなど適切な機関に相談しています。

小林さん）家庭内で親が不安だと子どもが不安になっていたように、親と子どもの状態はつながっていると感じて、子どもだけでなく、親が安心出来る場、愚痴が話せる場としての位置づけも子ども食堂に求められると考えています。

竹田さん）中・高校生からはとにかく話を聞いてほしいという声があり傾聴の姿勢を貫いていました。保護者からの相談は私たちだけでは受け止められなかったので、区役所の子どもはぐくみ室等の公的機関と情報共有をしてきました。学習面で言えば、休校中は先生に質問できず前に進めないことで前向きになれない時期もあったようでした。部活の大会がなくなり青春が奪われたという子どもの声もありましたが、コロナ禍での制限された活動に対して、子どもたちの方が大人より適応力は早いなという印象を受けました。

村井さん）今まであたりまえに出来ていたことが出来なくなりました。その隙間を埋めなおしていくために、雑談とか一緒にご飯を食べるといった当たり前だったことを続けていくことが大事だと思われます。

〈コロナ禍における学生ボランティア〉

竹田さん）学生から「ボランティア活動してもいいですか」と尋ねられたことがあります。大学生の「ボランティアをしたい」というニーズはたくさん聞いています。感染対策をしっかりしてもらったうえで、継続的にボランティアさんに来てもらえることはうれしく思います。

村井さん）各個人がボランティアとして出向いた先で、注意事項をしっかり守りながら取り組んでいけばいいのではないでしょうか。大学はコロナ禍でボランティア活動をお勧めできないのかもしれないですが、「ボランティアしたい」という学生の背中は押してあげてほしいです。

〈子どもや子育て家庭への支援〉

小林さん）私も子ども食堂を始めた頃は、「貧困」という言葉が前面に出ていて、その家庭にどう届けようかという思いが先行していました。今は、貧困家庭にどうしても届けないといけないという考えが先行するのも少し違うと思っています。子どもたち、親たちとつながることが出来る居場所がまずあって、その中で自然と関わっていくのが本来の流れだと思います。日常の範囲で出来るだけつながりを持ち、笑顔になることが出来るための媒体として食事などがあったりするのではないでしょうか。その心づもりで運営する側も実施するものだと思っています。

宇野さん）子ども食堂自体を最初からオープンな場にしています。回数を重ねると、毎回来る子どもたちがおり、その子どもたちは何かしら家庭で課題を抱えていることが分かってきました。そのような子どもたちが、お互い同じ気持ちを分かち合えるのか、一緒になっていることが多いようです。そこから関係性や支援が広がっていくイメージなのかと思います。お金があっても子育ては大変なのに、お金がない中での子育てはもっと大変です。今すぐ何かしなければならないという思いではなく、長期的な視点で支援を続けていきたいという気持ちを持っています。

参加者からの声（ＮＰＯ法人　子育てネットワーク　藤本明美さん）

「私たちは、妊婦や乳幼児の親子の居場所づくりの活動を続けています。今回のシンポジウムで登壇者のお話を聞き、コロナでも絶対続けようという勇気をもらい、希望を持ちました。地域を応援している団体を応援する仕組みが持続可能な活動に展開していくと考えています。」